

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成20年12月5日発行(毎月5日1回発行)  
第48巻12月号(通巻503号)

# 風土



12

山科・他

神蔵器

良雄・主税の机

秋風の他は置かざる机かな

その中に主税の位牌筐子鳴く

いろはにほへと酒の器の茶が咲いて

蓑虫の日向を移す遺髪塚

葱作る四十七士にもれし裔すえ

鳥瓜引き来しは誰雲の中  
鷹上げて天智天皇御陵かな  
色変へぬ松や明史のこゑのして  
大政奉還てふ間や新松子  
短日を間引き蹴鞠の音はづむ  
まさなる空はみ出して石榴笑む

土御門邸跡



# 竹間集

同人作品



秋大雨

徳丸 峻二

度外れの秋の大雨膝抱いて  
無花果の汁の手洗ふ夕日中  
竹伐つて風鳴る空を残しけり  
タクシーの動き始めし月明り  
星飛んで二階に声の上がりけり  
畳屋が香を置いて行く昼の月  
のぼり来て土軟らかし秋の山

野分

宮川みね子

たどりつく宇治十帖や秋立つ日  
西鶴忌入江に女魚を剥く  
壺の水たぶたぶはこぶ野分中  
一葉の名残りの井戸や小鳥来る  
光と風大空に満つ赤とんぼ  
秋の風水よりすこしさきをゆく  
いざよひや妣を連れだしたくなりぬ

月今宵

浜 福恵

月今宵諸国筆頭安国寺  
霧ながる丸に二の字の紋どころ  
尊氏が母の在所や稲架襖  
大杉を村の要に豊の秋  
葱苗を干して厄日の浦日和  
鶴鶴の先達ちてゆく夫の墓  
纜の地にとぐるなす秋彼岸

白毫寺

鈴木とおる

野分中新薬師寺より白毫寺  
萩くぐり登る石段白毫寺  
しばらくは勢至菩薩と萩の寺  
燕帰る白根耕地を斜ひに  
曲屋の馬なき馬屋に虫の声  
鳥海山半回りして秋の海  
秋めくや舌の体操らりるれろ

秋の風

外川玲子

白桃を剥く指先に刻流れ  
河馬の口ももいろに開き秋日和  
赤とんぼ水辺の空をすこし飛ぶ  
朝顔の思ひ出したるやうに咲き  
葛飾に「萬斎」がくる十三夜  
傘たたむ九月の雨に灯らぬ軒  
シャンプーの香がひろがつてゆく秋の風

秋風

山田 暢子

秋風に会ふや小川の橋渡り  
アトリエはその奥にあり竹の春  
秋刀魚焼くグリルの中の火の遊び  
十六夜の少し長きは子のメール  
小鳥来るコーヒーカップまた変へて  
抽斗Nホテルにてに聖書のありて秋燈下  
吊されて古りし糸瓜も獺祭忌

萩の花

門伝 史会

御岳山白花蓮華しようまかな  
萩の花注連縄太き御師の家  
急坂の御師集落や蛇穴に  
堰を越す水の白さや赤のまま  
校門ロシアにてに校長の立つ野分かな  
やや寒ロシアにての赤の広場に佇ちてをり  
露けしやルーブル札を余し来て

秋 冷

— 田中佐知子 —

秋冷や鵜の瀬は渦を深くして  
観音へひと足ごとの水の秋  
豊年の若狭に一滴文庫あり  
わかされや糲焼く煙校庭に  
若州の竹の紙漉くそぞろ寒  
月光や竹の化身の瞽女おりん  
粗壁に秋日沁み入る阿弥陀堂  
七つ塚古墳をつなぐ日要珠沙華  
鯖道の日ざしに流れ草の絮  
ゆく秋や田ごとに深き轍あと

# 山河集

同人作品



## 神蔵器選

大阪をとんぼ返りに西鶴忌  
それぞれの銘の銚蔵月渡る  
月明の門扉閉して冷泉家  
あんぱんの餡片寄つて子規忌かな  
十六夜の月盃に賜りぬ

橋添やよひ

書き遺すことは謝辞のみ法師蟬

小林和子

千枚の田水落して能登傾ぐ  
老いてなほ未完の塔や早稲の秋  
信心の一山に降る櫛の実  
虫のこゑ満載となる無人駅

盆用意鴉が屋根を突つきみて

十并三乙

まろき硯にまろく墨磨る迎盆  
盆過ぎの石屋の石に強日差

生姜摺る木綿豆腐を前にして  
地に寝かされて夕顔の下ぶくれ

むらさきの僧の法衣や酔芙蓉  
及川澄江

紫雲閣に二十五菩薩法師蟬  
ふるさとへ税金納め赤のまま  
秋澄みて木曾の大橋渡りけり  
地卵の売り切れてゐる良夜かな

月の道大き櫛を従へて  
井口ふみ緒

降りて行くあきつの増ゆる南谷  
ハンカチの木買つて九月の花屋かな  
後より煮物の匂ひ秋暮るる  
一人住む日々是好日秋刀魚焼く

◇特別作品抄◇

# ワシントンDCにて

市村 義夫

末娘米国へ嫁し秋の薔薇  
秋風を載せて転居の葉書来る  
秋澄みて恙無しやと米国へ  
緑多き公園近し鹿遊ぶ  
五車線を並んで走る良夜かな  
米人の握る鮭種秋灯  
火が燃えるケネデイの墓小鳥来る  
毬栗や官邸近し財務省



# 風土独語／神蔵器



良寛のてのひらとなり小鳥待つ

浅田 光代

山上樹実雄の句に

山麓をゆくてのひらの良寛忌

がある。自註に「山麓の春を訪ねる喜びも一しお。何となく快活なてのひらに『天真に任ず』の言葉がひらめく」とあった。

良寛という人にもし生前にお会いしたとしたら、そう簡単におつきあい出来る相手ではなからう。しかし、時をへだてて今日から見れば「焚くほどは風がもて来る落葉かな」と、在るがまま天真に任せて、誰よりも深く豊かな心を持って生きる。いつもやさしくなつかしい人である。掲出句の「良寛のてのひらとなり」に作意があると見る人もあろうが、そういう人とは共に俳句は語れない。

キャディより受く舞茸とOB球

遠藤逍遙子

OB球はout・of・boundsで、ゴルフではボールを打ちそこねて、コースから外へはずれてしまった球である。

私はゴルフはやらす、テレビの実況放映ぐらいしか見ていないので、よく解らないが、OB球を出すと前進四打とか二打、

練習は打ち直しを認められることもあるようだが、いずれにしてもOB球はスコアには致命的である。

なお舞茸はブナの大木の根元や切り株に群生し、舞茸を発見し、思わず踊り出したということから舞茸の名がついたという。ゴルフ場の近くに舞茸が生えているとも思われませんが、句としては舞茸でなければ面白くも味もない。

コスモスやの中の階段無人駅

井上美智子

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を思った。孤独で負しい少年と、級友を救って自らは溺死した親友と、夢の中で銀河鉄道に乗って、星座の駅を巡る幻想物語である。

掲出句は、小田急の多摩線にこんな駅があったように思うが、それはどこでもよいことだ。地価が高く線路は高架でつなぎ、ホームも駅も階段上にある。地上は開発がすすめられているもののまだ買い手がつかず、駅の周辺一帯はコスモスがいっぱい咲き乱れている。その中に階段が立ち上がり、人々は一段一段空に登るように無人駅へと登って行く。夢とロマン、賢治の童謡にも勝るとも劣らない。しかもこちらは事実のことである。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵 器選

九月尽渚伝ひに小犬跳ね 高槻 浅田 光代

まつすぐに胸へきちまに秋深む  
コスモスを抱くおくるみたくやうに  
良寛のてのひらとなり小鳥待つ  
キャデイより受く舞茸とOB球 川崎 遠藤道遙子

母の忌を半月延ばす秋暑かな  
釣竿に半ば翹伏す赤蜻蛉  
携帯を遂に持たされ敬老日  
富士仰ぐ東籬の菊に日燦燦  
月上る空の門外されて 岡山 高村 令子

地に人に起伏のありぬ大月夜  
十六夜や行かねばならぬ友の通夜  
忌を修し仏の残す望の月  
静止画となりし山里居待月

日焼子にして預りし子を帰す 伊東 稲葉ちよこ

でこぼこの川の音より鬼やんま  
非常階段下りてちちろのちぎり鳴き  
たましひのすきとほるまで花野ゆく  
雁渡し今日のしまひの出刃を研ぐ  
水音に時を刻みて添水かな 川崎 井上美智子

コスモスの中に階段無人駅  
霧いつか雨の湖畔に雨情歌碑  
道草と云はれ花野に深く入る  
子等送る尾灯はるかに無月かな  
風かよふところに出でて吾亦紅 東京 柿沼 盟子

掌に適ふ重さの桃を買ひ  
秋の山空を大きく従へて  
星流れ森のいささか軽くなり

奥の院の奥に日照雨や杉は実に

大雄山最乗寺